

能登半島の西海岸に、富来とぎという町がある。半島のクビからたどると、輪島わじまとの中間点あたり。この町の寺に、地獄絵があるときいて、見に行つた。善照寺。鎌倉期に建てられた淨土真宗の寺である。

「めずらしいことなんだよ」と、所在をおしえてくれた義弟の西山郷史にしやまことしはいった。「真宗の寺は、親鸞しんらんの上人じょうじんの絵図はかけるが、六道絵なんかは置かないんだ。まして能登は真宗の国なんだからね」

義弟は民俗研究家だが、奥能登の珠洲すずにある古い寺の若和尚おしゃうでもある。案内してくれたのは、かれの友人の四柳嘉章よつやなぎかしようさんで、こちらは珠洲の南・穴水あなみずで神職をつとめる。愉快な組み合わせだ。

善照寺で地獄絵を見るのは、じつは二度めだ。一九八九年の秋、義弟と訪ねて下見をしている。そういう古い作品ではないな、というのが、そのとき抱いた印象だった。

確証があるわけではない。地獄絵には制作年度の記入もなく、誰が描き、なぜこの寺の所蔵となつたのかもわからないのだ。しかし、鬼の描きかたが、江戸期の地獄絵草紙にちかい。つまり平安・鎌倉期の絵巻にあらわれる鬼とくらべて、ずっと俗化している。<sup>(1)</sup>

これまで地獄絵を見てきた感想では、鬼の図像は、時代がさがるにつれ、底が浅くなつてくる。鬼が表現しているはずの大自然の威力が薄められ、矮小化されていく、といえばよいか。その過程は、たぶん、人間が自然に対する恐怖いふを失つていく過程に照応しており、また、オニとみなされた異形のひとびとが、しだいに平地の体制に組みこまれていく事情を反映している。【大江山絵詞】(十四世紀)